

# 高等学校のキャリア教育における進路成熟の変容に関する研究

胡 田 裕 教 (東大阪大学敬愛高等学校)

## 問題の所在

科学技術が進歩した現代において、便利な世の中になったが、その一方で、日本の伝統的なものが失われ、人間関係が希薄になったとも言われている。また、産業・経済の構造的な変化や社会状況の変化に伴い、進路環境が変化し、職業意識・勤労意識の希薄化、そして、職業人としての基礎的資質・能力の低下が問題視されるようになった。その結果、フリーターやニートの問題への対策として早い時期からの職業意識や勤労意識の土台づくりを行う必要が生じ、児童生徒に直接関わる教育や学校の現場にも大きな影響がもたらされるようになった。

このような社会情勢の中で、これまでの進路指導を見直し、新たな形で、「キャリア教育」が推進されようとしている。キャリア教育は「一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」と定義されている。とりわけ、体験を通じて役割や社会性、職業観・勤労観を養うことに重点が置かれている。キャリア教育が現在の学校教育において必要とされている理由は、社会からの要請という側面とともに、児童生徒の内面的、つまり、社会で生きるための力や意欲を育む必要性に迫られているからであろう。

一方、高等学校に焦点をあてると、平成20年度の文部科学省の調査から、国公私立の全国の高等学校における中途退学率を学年別に見ると、第1学年で3.0%、第2学年で1.8%、第3学年で0.6%となっており、第1学年においてその割合は高くなっている。また、同じく、事由別中途退学者数の構成比を見ると、「学校生活・学業不適応」が39.1%、「進路変更」が32.9%となっており、それらをあわせると全体の7割以上を占めることになる。

以上のことから考えると、目的意識がまだ明確になっていない第1学年生徒に対して、体系的なキャリア教育を実施していくことに大きな意味があると考えられる。体系的なキャリア教育プログラムの開発の必要性はさまざまところで言及されている（たとえば、三村, 2004 ; 宮城, 2006）。

## 研究目的

本研究は、勤務校の第①学年で基幹となるコースにおいて、体系的なキャリア教育プログラムを開発し、教育課程に位置づけたキャリア教育を継続的に実施していく。具体的には、総合的な学習の時間を利用して1年間を通じた授業「キャリアプランニング（1単位）」を行う。その中で各自の段階に応じた“気づき”を与え、それを自分の“生き方”に照らし合わせながらしっかりと自己理解の上に、進むべき方向（進路）を節目節目に考えさせ、決定していく能力を養っていくようにする。また、社会性や職業観・

勤労観を育み、生徒の不安定な心理を支援しながら、その根底となる「生きる力」を養っていくものとする。その結果、「進路成熟」にどのような変容が生じるかを見ていく実証研究である。

## 研究方法

### (1) 研究対象

対象となるのは、都市圏に位置する勤務校の基幹となるコースに在籍する全生徒〔2クラス82名(女子)〕である。

### (2) 調査時期とその方法

2009年4月～2010年2月末までの1年間を通して、総合的な学習の時間を利用して、授業「キャリアプランニング」を週1回(金曜日・5限目、50分授業、1単位×26回分)、2名の担任教諭が自クラスで実施した。また、講演会、社会見学などは2クラス合同で実施した。なお、各担任の経験年数および性別は以下の通りである。1組：25年目の男性教諭、2組：1年目の女性教諭であった。

また、金曜日6限目はホームルーム(H・R)であったので、5、6限目を通して実施した場合もあった。授業時間以外では、冬季休暇での宿題、各担任による個人面談(1人につき約15分の半構造化面接を、職業観・勤労観を育む4領域、つまり、人間関係形成能力・情報活用能力・将来設計能力・意思決定能力、に準拠した11項目で実施)を期間内に1回実施した。これは、既に行ってきた授業に対するフィードバックという位置づけと、それを行っていくことが生徒一人一人の精神的な安定につながるものと考えた。それと同時に教師と生徒との「ラポール形成」、教師の「生徒理解」を促すものと考えて実施した。

なお、授業実施にあたっては、筆者と担任2名との計3名で1つのチームを形成し、週に1時間の打ち合わせを行った。また筆者はコンサルテーションをしていく立場であり、話し合いの中で、授業の修正への助言をし、次の授業がより良いものになるよう常に心がけてきた。

### (3) 質問紙

授業「キャリアプランニング」を実施していく中で、進路成熟を測っていく質問紙として、(財)日本進路指導協会(1999)が開発した「進路成熟尺度(高校生版)」を使用した。これは、「自己実現的態度」「進路計画」「進路決定」という3つの下位尺度から構成されている。各下位尺度は10項目ずつから成っているため合計30項目である。5件法で回答を求め、それを各項目の得点とした。

### (4) 開発したキャリア教育プログラムの全体計画と目標

「進路成熟」を育成し、高めていくためには、人間関係形成能力の育成、自己理解・他者理解、職業理解、体験学習、個人面談(キャリア・カウンセリング)をプログラムのなかに位置づけ、それぞれの活動を通じて、目標となる能力・態度・意欲を育成していくことが必要である。また、「進路成熟」は単数回や短期の働きかけや活動ですぐに育成されるものではなく、積み重ねが必要である。総合的な学習の時間を利用して週に1回、年間を通して継続的にプログラムを実施することで、少しでも積み重ねを図ろうとした。なお、授業の実施項目内容はTable.1に示した通りである。

授業「キャリアプランニング」の実践を通しての結果

本プログラムの実施前（4月）と、実施してからちょうど半年が経過する頃（10月）に進路成熟の得点について分散分析を行った。なお、「進路成熟尺度」で示されている3つの因子（進路計画・自己実現的態度・進路決定）それぞれにおける結果を示したものが、Table.2である。

Table.1 授業「キャリアプランニング」の実施項目内容

月・週	テーマ	学習内容
4月 1週 (24)	オリエンテーション キャリア意識調査	自分の人生を考えていく意義を理解する。 進路発達度チェック
5月 2週 (1・15)	自己肯定感を養う。 コミュニケーションスタイルから自他を理解する。	エンカウンターグループにて自己肯定感を高める。(Iam OK.) エンカウンターグループにて自己理解・他者理解を深める。
6月 3週 (5・12・19)	自己の特徴を知る①（進路意識の観点から） 自他の特徴を知る②（価値観の観点から） R-CAP for Teens [リクルート]（適学・適職検査）〔5, 6限〕	エゴグラム実施、個人ワーク、見立て。 「ライフライン」による自己理解・他者理解 パーソナリティ、職業適性、学問適性の提示。 320問にマークシート回答をする。
7月 1週 (3)	進路講演会（6限目感想文（「10年後・20年後の私」）	今を大切に生きることを考える。また、聴く姿勢を養う。
9月 4週 (4・11・18・25)	R-CAP for Teens [リクルート]（適学・適職検査）振り返り① R-CAP for Teens [リクルート]（適学・適職検査）振り返り② 上級学校理解 社会見学事前学習① 社会見学①（ハローワーク布施）〔5, 6限〕	R-CAP 検査結果の見方。R-CAP を活用して「自分の可能性を広げよう」を実施。個人、グループワーク。 R-CAP を活用して「興味・価値観から文理&科目を選ぼう！」を実施。個人、グループワーク。 見学先等からの資料に基づいて行う。 一定の目的意識を持って見学
10月 3週 (2・9・30)	社会見学事後振り返り① 自己を受容する。 キャリア意識調査	見学先等からの資料を基に行う。個人、グループワーク 感想 エンカウンターグループにて自己受容を深める。 進路発達度チェック
11月 4週 (6・13・20・27)	社会見学事前学習② 社会見学②（ATCグリーンエコプラザ）〔5, 6限〕 進路演劇鑑賞（6限目感想文（「お世話になったこと・してあげたこと・迷惑をかけたこと」） 社会見学事後振り返り②	見学先等からの資料に基づいて行う。 一定の目的意識を持って見学 今までの自分の人生を振り返る。また、聴く姿勢を養う。 見学先等からの資料を基に行う。個人、グループワーク 感想
12月 1週 (4)	R-CAP for Teens [リクルート]（適学・適職検査）振り返り③ 上級学校理解	・R-CAP を活用して「行動の中に自分の個性を探ろう！」を実施。 個人、グループワーク ・(情報活用・職業調べ学習) 職業人インタビュー説明（調査シート宿題）
1月 4週 (8・15・22・29)	職業人インタビュー 社会見学事前学習③ 社会見学③（大阪企業家ミュージアム）〔5, 6限〕 社会見学事後振り返り③ R-CAP for Teens [リクルート]（適学・適職検査）振り返り④	職業人インタビュー 評価シート作成 見学先等からの資料を基に行う。 一定の目的意識を持って見学 見学先からの資料を基に行う。個人、グループワーク 感想 R-CAP を活用して「仕事の中身あてゲーム」を実施。個人、グループワーク
2月 3週 (5・12・19)	職業別体験セミナー事前学習 職業別体験セミナー実施〔5, 6限〕 ・職業別体験セミナー振り返り ・自己のキャリアプランを考える ・キャリア意識調査	事前のアンケートに基づき、希望する職業の理解を深める。 本校にて職業別体験を行う。(提携業者依頼) ・分かち合い ・自己のキャリアプランを作成していく。 ・進路発達度チェック

月・週の（ ）内数字は実施日を示す

進路計画と自己実現的態度と進路決定の得点結果を時期群別に示したものである。

まず、進路計画について分散分析を行った結果、群の効果は有意であった ( $F(2,68) = 3.58$ )。Ryan's method を用いた多重比較によると、2月群の平均が10月群の平均よりも有意に高かった ( $MSe = 22.76, p < .05$ )。

次に、自己実現的態度と進路決定について分散分析を行ったが、群の効果はそれぞれ有意ではなかった ( $F(2,68) = 1.26$ )、 $F(2,68) = 0.43$ )。

**Table.2 進路成熟 (進路計画と自己実現的態度と進路決定)の得点 (満点各 50 点)**

		4月	10月	2月
N		69	69	69
進路計画	平均	28.0	27.6	29.6
	標準偏差	9.6	9.0	9.0
自己実現的態度	平均	38.6	39.3	39.9
	標準偏差	7.7	7.3	8.0
進路決定	平均	32.0	32.1	31.5
	標準偏差	8.2	7.4	7.6

## 考 察

進路成熟の変容、特に「進路計画」に関しては、1年間を通して行った本プログラムの効果が少なからず現れているのではないかと考えられる。

また「自己実現的態度」「進路決定」に関しては、第1学年のプログラムだけでなく、もう少し年月をかける必要があるように思われる。または、ポイントを絞ったプログラムの再構築が必要だと考えられる。

## 今後の課題

本プログラムは、週に1度の授業であるので、本授業以外での時間で進路成熟に影響を及ぼすものがあるとしても不思議ではない。したがって、キャリア教育が学校教育全体を通して行われるものとした視点からすると、本プログラム、教科での実践、特別活動等を有機的に結びつけていくことが大きな課題である。一方、本プログラムの実践も今年度で4年目になる。しかし、現在は第1学年のみの実施であるので、第2学年、第3学年に続くようなプログラムを開発していくことや他の校種とのネットワークを構築することも今後の課題である。

## 参考文献

- 経済産業省 編 (2009) 『キャリア教育ガイドブック』 学事出版  
 國分 康孝・國分 久子 総編 (2004) 『構成的グループエンカウンター事典』 図書文化  
 国立教育政策研究所 (2007) 『キャリア教育への招待』 東洋館出版社  
 三村 隆男 (2004) 『キャリア教育入門』 実業之日本社  
 宮城まり子 (2006) 『キャリアサポート』 駿河台出版社  
 森 時彦 (2008) 『ファシリテーターの工具箱』 ダイヤモンド社  
 日本キャリア教育学会 編 (2008) 『キャリア教育概説』 東洋館出版社  
 全国進路指導研究会 (2006) 『働くことを学ぶ』 明石書店 等